

牧師室から (2022.10.2)

この数日弔問客がポツリポツリ来る。一応「うちはキリスト教ですけどいいですか」と申し上げる。「宗教は関係ないので」と言って、祭壇はなく、遺影と遺骨だけだが、前に座り丁重に拜んでくれる方が多い。確かに遺影と遺骨を拜むということはどうかと問われれば、それなりの意見もあるだろう。しかし訪れた方が心から哀悼の意を示してくれるのは慰めになる。

昨日少し離れたところに住んでいるらしい高齢の方が、おそらく父より年上であろうと思われるが、目が悪くほとんど見えないのに杖もつかずに手探りで我が家まで来てくれた。そしていきなり「線香を上げさせてくれ」と言って入って来られた。玄関の段差を越えるのも難しく、ヨロヨロしながらいたので手を取って遺影の前まで案内した。暫くそこに座って遺影に語りかけておられたが、父がいなくなって本当に悲しく寂しそうであった。私はその人に父の生前お会いしたことがなかったので、自分の知らない父の交友関係を知ることとなった。

とにかく弔問とはどのようなもので、どう対応すべきかということを考えさせられた。いずれにしても宗派に関わらず、本当に亡くなった人のことを思って哀悼の意を表すならばそれでよいと思っている。キリスト教では、確かに死は天国への凱旋だが、やはり残されたものにはどこか寂しさが残ることは否めないものである。

(鈴木淳一牧師)